

能登半島 復興応援

2024年12月6日取材
石川県

中能登町久江地区

「能登つむぎ会」で紡がれる復興への歩み

赤肉メロン

「レノン」

でつながる地域の輪

(編集部)



↑「能登つむぎ会」の皆様。奥左から久島英治さん、眞田将充さん、ヘパールセバスチャンさん、假名田人志さん、手前左から澤井一美さん、デフォルジュ デルフィンさん、会長の松木博さん。



↑「能登つむぎ会」の雰囲気を表すようなパッケージデザイン。

「のとつむぎ」

中能登町久江地区で発足されたメロン栽培を行う地域住民グループ「能登つむぎ会」。2022年に6人から始まり、土日だけ参加できる人も含めて今では13名が所属しています。中でも若手の一人、眞田将充さんのハウスでは4月下旬に播種し5月下旬に定植、「能登つむぎ会」の会長を務める松木さんのハウスでは時期をずらして6月上旬に定植します。8月中旬〜9月上旬ごろに収穫期を迎えると、その時々で参

加可能なメンバーが出荷作業を行います。栽培において特徴的なのが、基本的に1株1果にすること。そうすることで1玉2・5〜3kgにもなり、3kgを超えるものもできます。平均糖度は16度前後に達するものもあるとか。

2024年はまだ記憶にも新しい能登半島地震が発生した年であり、この久江地区も大きな被害を受けました。地元根づいた千年続く神社では、倒壊した鳥居の撤去を余儀なくされ、その費用は区にとって大きな負担となる金額でした。そこで眞田さんが発起し実施したのが鳥居復興資金のクラウドファンディング。そして「能登つむぎ会」が作った「レノン」メロンをその返礼品としたのです。手塩にかけて育てたメロンの名は「のとつむぎ」。織物の町である中能登町から一本ずつ糸を紡ぐように、震災から能登が一步步復興しているように、という願いが込められているそうです。

地域概況

中能登町は能登半島中部に位置し、古くから繊維の産地として知られます。中能登町に伝わる能登上布は麻糸を用いた手織りの織物で細やかな縞模様の特徴です。昭和初期には麻織物の生産高が全国1位となり、昭和35年には石川県の無形文化財に指定されています。中能登町はJA能登わかば管内に位置し、管内では甘くて、やわらかくておいしいと定評の「能登白ねぎ」、日本種の「能登小菊かぼちゃ」、古くから受け継がれてきた「ころ柿」などのこだわりの特産物が作られています。

地域のみんなと 楽しむ農業を 「レノン」との巡り合わせ

2022年の春前でした。町おこしの活動をしている松木さんの呼びかけで、旧知の仲でありすでに定年を迎えられていた久島さん、假名田さんの3人は、水稲育苗後の空ハウスを有効活用し「何か楽しい農業ができないか」とメロンを作ることを決めました。それなら地元ではあまり作られていない赤肉種がいい、という久島さんの提案から、すでにメロンの播種可能な期間





↑1玉、2.5～3kgにもなる「能登つむぎ会」で作られた「レノン」。グループメンバーが作った水引がつけられ、あたたかみのあるパッケージで出荷される。



↑人手が必要な管理作業は、グループメンバーに声をかける。参加は自由でできる形で参加できることが「能登つむぎ会」のよさ。



↑全国で唯一、田畑を守る「かかし」を主祭神とする久氏比古神社の鳥居。地震で根元に大きなヒビが入り、倒壊による二次被害を防ぐために撤去された。

→
2024年夏の久江地区の集会所には、クラウドファンディングの返礼品として箱詰めされた「レノン」がずらりと並んだ。もちろん箱詰め作業も参加できるメンバーが集まり行われる。



久氏比古神社の鳥居復旧へ

2024年1月1日に発生した能登半島地震により、久江地区にある久氏比古神社の鳥居も被災。余震などにより鳥居が倒壊する危険性があり、境内下の民家への二次被害が懸念されました。しかし対応するにも地区の財源では及ばず、神社仏閣への公的な復興支援も得られなかったため、鳥居の撤去、再建のためにクラウドファンディングを実施されました。その結果、全国の約120名の方からの支援を受け、被災した鳥居の再建に向けて動き出しています。

が終盤となる時期に播種できる品種だった「レノン」が選ばれました。

松木さんのハウスでの「レノン」メロンの栽培がスタートし、播種は松木さんと久島さんの2人で行い、自家育苗、定植や誘引作業など人手が必要な作業には地域の同世代にも声をかけ、1年目は110株を植え付けたところ約9割が収穫できました。道の駅での販売は好評で、祭りで地元の人に振舞うとおいしい！と評判だったそう。

今や会の中心メンバーとなった眞田さんも、当初は時々手伝う程度でした

が、地元の人々が協力して農業をするスタイルに共感し、2年目からは自家ハウスでも「レノン」メロンの栽培を開始しました。2017年、30歳の時にお父様から引き継いだ畑で家庭菜園から始め、今ではカボチャ、カブ、メロンを栽培しています。メロンはまだハウス1棟分の作付けですが、2025年作は倍の2棟、可能なら3棟に増やしたいと意気込みを見せておられました。

「能登つむぎ会」は久江地区の生産会議においても徐々に中心的存在とな

りつつあり、地域の人が集まるのが少なくなった近年、自発的に互いを助け合うコミュニティの「輪の強さ」を強く感じました。

地域の小さな集まりから始まった「能登つむぎ会」の「レノン」メロンは、クラウドファンディングの返礼品「のつむぎ」としてだけでなく、そのおいしさからも多くの方の心をつかんだことでしょう。久江地区で作られた「レノン」の評判が広がるにつれ、なんと地域のスーパーには青森県産の「レノン」も並び始めたとか。

「レノン」の栽培においては収穫時期の見極めなどまだ課題もありますが、2024年からは暑さに強い「レノンウエーブ」も採用されています。

2024年から新たなメンバーとしてフランス出身のご夫婦も加わり、「能登つむぎ会」はより一層多様な賑わいを見せていました。2025年度からは、ふるさと納税の返礼品としての出品も予定しています。

一日でも早い地域の復興に向けて、皆様の笑顔とともに「のつむぎ」が広がっていくことを願っています。